

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 106 号

平成 23 年 2 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

<http://encounter.agape.gr.jp/>

相沢良一

「黒潮の神学 下巻」(黒潮社)より(9)

新しき建国の日

『文芸春秋に見る昭和史』第 2 巻、昭和 33 年の項目に、「紀元節についての私の信念」という三笠宮の論文が収録されている。この論文は当時大きな話題となったが、いまもなお傾聴に値いする。ちなみに紀元節が「建国記念の日」として、国民の祝祭日に復活したのは、昭和 42 年になってからである。

「そもそも 2 月 21 日の根拠は、日本書記「辛酉年春正月庚辰朔天皇即帝位於橿原宮」による。このカノトリの年に大変革が起こることを前提として、60 年を一単位とし、21 単位 = 1260 年を一周期として歴史が変革されるという運命論的歴史哲学が中国から輸入された。」「おりしも推古天皇の第 9 年（西暦 601 年）がこの辛酉にあっていたので、これを基点として逆算し、1260 年に当たる辛酉の年をもって神武天皇の即位とした。」「したがって神武天皇即位が今年（昭和 34 年）から 2619 年前であったということも、いずれも後代の作意である。

「したがってその架空の年月日を太陽暦にあてはめた 2 月 11 日も

架空の日であることも当然である。」...

「政治は真理、真実を基礎とすべきである。その真理、真実は学問において導き出されることが多い。したがって政治家は、学者の研究の成果を十分に積極的に利用していただきたい、と同時に、政治家が学問の成果を無視したり、あるいは全く相反することを言い出したときに、学者が黙っているのは学者の分を守っていることではなく、みずから学者の責務を放棄したことになる。」

「昭和 15 年に紀元 2600 年の盛大な祝典を行った日本は、翌年には無謀な太平洋戦争に突入した。すなわち架空な歴史を信じた人たちは、また勝算なき戦争を始めた人たちでもあったのである。

もちろん、私自身も旧陸軍軍人の一人として、これらのことには大いに責任がある。だからこそ、再び国民をあのような一大惨禍に陥れないように努めることこそ、生き残った旧軍人としての私の、そしてまた今日学者としての責務だと考えている。」

これは三笠宮のなみなみならぬ戦責告白の表明である。「政治家が学問の成果を無視したり、あるいはまったく相反することを言い出したときに、学者が黙っているのは、決して学者の分を守っていることではなく、みずから、学者の責務を放棄したことになる」と言われた。

しかし、残念ながら、ペンは剣によって沈黙を強いられたのである。それが昭和の歴史であったのである。ある者は学匪と罵られてその職を去らざるを得なかったのである。節を屈しなかったものは、投獄され、非業な死を遂げなければならなかったのである。

日米安保条約が日本国憲法に優先するような国を、だれか残念に思わないでよいであろうか。米軍に基地を提供して、この国の安全を護ってもらわなければならない国が、どうして独立国であり得ようか。崇高なるわが日本国憲法の理念が達成された暁こそ、そこに新しい「建国の日」のあることを強く訴えずにはおれないのである。

「政治は真理、真実を基礎とすべきである」との三笠宮の発言は、千鈞の重さを有しているではないか。 (88・2)

わが昭和史と天皇

1939（昭和14）年8月、私は教育召集で学窓から名古屋の輜重第3連隊に入隊。1ヶ月後臨時招集に切り替えられ、48時間の外泊でそのまま中国の戦場に送られ、4年間を戦場で過ごしました。この4年間は、じつはわが「昭和史」であったわけであります。

わたしはこの戦争を聖戦と思いこんでおりました。そのため今こそ義勇公に奉ずべきの秋である。せっかくの学業を中断しなければならなかったことは残念ではあるが、クリスチャンの一兵士として真面目に軍務に精励しようと決心をし、そのように努力をいたしました。

さいわい兵科は輜重兵であり、戦地に赴いて間もなく私は通訳の要員に選ばれたため中国語を習得でき、宣撫班に属しておりましたので、歩兵のような悲惨な経験はあまりいたしませんでした。

4年間の戦場生活は、全く記憶の戻らない出来事のほうが多く、戦友諸兄の思い出話で呼び起こされた記憶もかなりありました。...

残念ながらわたしは、この戦争についての正しい評価をくだすことができず、日本はアジアに新秩序を建設するため、正義の戦争をしているのであると信じておりました。しかし、実際に戦場で体験したことは、戦争がいかに人間を非人間化するかという戦争のもつ悪魔性でありました。わたしは、戦場にはじめて、聖戦など存在しないのだということ、身をもって体験をしたのでした。

この戦争が侵略戦争であることをほんとうに知ることが出来たのは、戦後になってからでした。それでは私の兄を含めて戦場で散華したものは、無意味な死を遂げたのでしょうか。決してそうではないのです。いま、わたしたちが手にしている主権在民、戦争放棄、基本的人権の確立をうたった日本国憲法こそ、じつは今次大戦における300万人に及ぶ戦争犠牲者の血をもってあがないとったものであることを、わたしは確信いたしておるのであります。...

（88・11）

村田四郎先生の説教

いまから 31 年前、即ち（村田四郎）先生牧会 50 年を記念して先生の門下生が相寄り『原始キリスト教研究』と題する論集を先生に献呈。…本書第 3 部「人と事業」に先生は『回顧 50 年』と題する一文を寄せておられる。その結びのことばを引用する。

「種々回顧して来たが、現在は自分にとって最良の時ではないかと思われられている。もっぱら教会に奉仕しつつ、後進のため神学の講義をすることを許され、かくしてあるいは学び、あるいは思索し、あるいは著述しながら老年を忘れて働く事ができるのは、何と祝福されたことであろうか。しかし、自分の心を捉えておるのは、次のパウロの言葉である。

「わたしが既にそれを得たとか、すでに完全な者になっているとかいうのではなく、ただ捕えようと追い求めているのである。そうするのは、キリスト・イエスによって捕えられているからである。兄弟たちよ、わたしはすでに捕えたとは思っていない。ただこの一事を努めている。すなわち、後のものを忘れ、前のものに向かってからだを伸ばしつつ、目標をみざして走り、キリスト・イエスにおいて上に召して下さる神の賞与を得ようと努めているのである」(ピリピ書 3・12 - 14)

死の時までこの言葉のように生きていきたいと願っておる。ことに老年になって自分をむちうつ事に欠けがちな自らを、最後まで悔改と感謝と志とに生きてゆく事を祈りつづけるものでありたいと念願しておる。」

この 9 年後、先生は 83 歳で米国に移された。今回の『村田四郎説教集』におさめられている先生最期の説教は、1969（昭和 44）年 2 月 16 日になされた「我らのうちに住まいたもうキリスト」であった。「私はもう十分に生きたと思うんですけれども、でもまだ仕事が片づかない。しかし、生きている以上神のみわざも真剣に、命がけでやらんということを思いながら、朝夕「主よ、来りて助け給え」という祈りを絶えずしておる」。これが村田四郎先生であられたのであ

る。

(93・8)

主は驚くべきことを地に行われた

万軍の主は我らとともにおられる。ヤコブの神はわれらの避け所である。来て、主のみわざを見よ。主は驚くべきことを地に行われた。主は地の果てまでも戦いをやめさせ、弓を折り、やりをたち、戦車を火で焼かれる。」
(詩篇 46・1 - 11)

終わりの日に次のことが起る。…彼はもろもろの国のあいだにさばきを行い、多くの民のために仲裁に立たれる。こうして彼らはそのつるぎを打ちかえて、かまとし、国は国にむかって、つるぎをあげず、彼らはもはや戦いのことを学ばない。(イザヤ書 2 章 1 - 4 節)

「終りの日」というのは、この世の滅亡の日を指すのではなくして、もはや「戦いのことを学ばない」日の実現であったのでした。

じつに、全人類の悲願とも申すべき「戦いのことを学ばない日」が、わが愛する日本の国に到来をいたしたのでした。わたしたちが「敗戦」を契機として手にした『日本国憲法』こそ「驚くべきことを地に行われた」、「主のみわざ」であったと申して、決して過言ではないのです。

「日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。」

わたしはこの「第9条」を読む度に、このあとに祈りの言葉「アーメン」ほんとうにそうです を付け加えたい思いを禁ずることができないのです。

このような『日本国憲法』は、私たちが手を拱いていて、手にしたではありません。このために 300 万人に及ぶわが同胞の犠牲の血が流されていたのであります。さらには、2000 万人を超えるアジアの人々の犠牲に思いをいたさねばならないのです。わたしは戦場

から生きて帰って来た者として、命のある限り、このことを訴えずにはおれないのです。... (95・6)

石叫ぶ

戦死した次兄が不憫でならない。次兄は 300 万分の 1 滴の犠牲の血を流したのではなかったか。わたしの目の前で斬首されたあの中国兵の血も、体力が尽き路傍に倒れ、老兵の将校から耳に銃弾を撃ち込まれた無辜の農民の血も、2000 万分の 1 滴の犠牲の血ではなかったのか。

犠牲の血なくして、人間の罪業の赦される道は閉ざされている。犠牲の血はあがないの血であったのである。これが宗教の、さらにはキリスト教の本質である。...

この『日本国憲法』は、われわれ国民が獲得したものではなくして、わが宗教的信念よりすれば、これは紛れもなく神の賜物と言うべきである。わが同胞 300 万の、さらには、アジア二千万に及ぶ尊い犠牲の血によって、あがない得たものと言うべきではないか。

戦場生き残りの者は、年々歳々減少していく。われわれがああ苛烈な戦場より生還をし、戦後 50 年を生き延びてきたのは、遅れて来た者たちのために、じつに戦争の悲惨さと蛮行とを、さらには平和の尊さを、身をもって訴えるがためではなかったのか。人は無意味に生きているのではない。目的をもって生かされているのである。

わたしが戦場にあって、いな、戦場があればこそ、読み続けてきた新約聖書の中に、「このともがら黙さば、石叫ぶべし」(ルカ 19.40) とある。石を叫ばせてはならないのである。

付記 この一文は、1996 年 4 月刊行された婦人の友社『私がいま伝えたいこと』に収録されたものである。

キリスト教の日本的展開

筆者は6年前に『キリスト教の日本的展開』と題する一書を上梓した。その内容はほとんど『黒潮』紙上に発表したものであるが、これはあくまでも『キリスト教の日本的展開』であって、『日本的キリスト教の展開』ではなかったのである。

筆者が40数年間『黒潮』紙上において宣べ伝えてきたものは、使徒パウロが述べ伝えてきた「十字架の主なるイエス・キリスト」以外にはあり得なかったのである。

「十字架の言は、滅び行く者には愚かであるが、救にあずかるわたしたちには、神の力である。すなわち、聖書に「私は知者の知恵を滅ぼし、賢い者の賢さをむなししいものにする」と書いてある。...

しかしわたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝える。このキリストは、ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなものであるが、召された者自身にとっては、ユダヤ人にもギリシャ人にも、神の力、神の知恵たるキリストなのである。神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからである。...

あなたがたがキリスト・イエスにあるのは、神によるのである。キリストは神に立てられて、わたしたちの知恵となり、義と聖とあがないとになられたのである。それは「誇るものは主を誇れ」と書いてあるとおりである。」(第1コリント第1章18-31節)

使徒パウロの宣教の使信は、じつに、このように単純であり、このように明快であったのである。2000年後の今日、いま、われわれがこの国にあって宣べ伝え、訴えているのは、全くこれと同じである。そこには、何らの変容もなければ、歪曲もなかった。

十字架のイエス・キリストに立ちかえることによって、地上の教会はその都度改革され、新しくされてきたのである。

キリスト教の日本的展開とはこの福音を日本に伝え、その信仰において日本を愛し、日本国に仕えること以外にはない、と言わざるを得ないのである。

(97・7)

第6講 聖化論 靈魂を凝視して

私が献身したのは丁度その頃であった。わたしは誰からも勧められなかった。私はその頃、将来の進路にゆきづまりを感じていた。私はこれから如何して良いのかさっぱり見当がつかなかった。そうした時にわたしは神の召明を受けたのだった。これは最初は心中に芽生えた一つの小さなささやきであった。月日と共にそのささやきは大きくなって、遂にはそれが重石のように私の心を压した。

私は牧師になりたいとは全然考えた事もなかった。私は恐れ迷った。私は意を決して祈った。わが町を一望の下に眺め得る小高い丘に坐して真剣に祈った。次の日も亦そこで祈った。3日目の午後である。私が祈って居ると矢のように一つの聖言が私の心を突きさした。それは「神を愛する者すなはち御旨によりて召されたる者の為には、凡ての事相働きて益となるを我らは知る」と言うロマ書8章28節のみことばであった。私の眼は涙で曇った。そうだ、今こそ一切を主に捧げ、これからの道はことごとく神の聖手に委せて進もう。わたしは島に渡った。そこで神学校に入る準備をした。

この頃から十字架が私の魂に刻み込まれるようになってきた。...

それから間もなく私は上京して、純福音派と称される学校に入った。...

私は偽善者だ。表面だけは真面目らしくても心の内を視よ、私は欲する善は何一つ出来ないのだ。欲せざる悪は無意識の中に私の内で暴力を振っている。私は二重人格者だ。私はこの学校の先生達の書いたものを読んで見た。凡て主に居る者は罪を侵さず、凡て神より生まるる者は罪を侵す事能わず、であると。これでは自分のような者は所詮神の子に相相応しくない。だが聖潔められたる人とは、如何なる靈魂の状態なのであろうか、基督者の完全とは何を指すのであろうか。...

一日、私は近くの古本屋で内村鑑三氏の『ロマ書の研究』という分厚な本を見附けた。毎朝、私はそれをむさぼるように読みだした。やがてその第 33 講即ちロマ書 7 章に達した。視よ、そこには明らかにロマ書 7 章後半は、パウロの信仰に入りし時以来の苦悶であると記されているではないか。私は飛び立つ程嬉しかった。

「いやしくも基督信者が真のキリスト者である以上、理想と実験の矛盾より起こる言い難き苦悶を、必ず担うに相違ないのである。信仰に入りしのち 1 回もこの種の苦悶を味わずと誰か敢えて言い得る者があるか。…」

私は読み了えて熱き涙をその頁の上に注いだ。これで良かったのだ。私は間違っていなかったのだ。聖潔められたるものとは、何も罪を犯さざる完全な靈魂の状態の持主ではなくして、実に心中の矛盾苦悶が益々激烈となる靈魂の状態ではないのか。…

幸福なるかな悩む者よ、かかる者にとってこそ十字架が唯一の生命となり得るのである。「功績なくして神の恩寵に由り、キリスト・

イエスにある^{あがない}贖罪によりて義とせらるるなり」との聖言がどれほど私を力づけてくれた事であろう。義とせらるるなり。一度だけ義とせられたのではない。日ごとに十字架の故に義とせられつつあるのだ。ここに今や十字架は私にとっても日々の十字架となったのである。…

私は弱い、醜い、躓き倒れる。されど首を挙げ十字架を視よ、「キリストは神に立てられ汝らの知恵と義と聖と救贖とになり給へり」。キリストこそ私の義であり、聖であり、贖いであり給う。されば臆することなし。ルターのいいし如くただ一物を凝視^{みつ}めて進み往かん。

私の凝視の目標は何であるか。死と罪と陰府^{よみ}に勝ち給いしキリストとその十字架のみである。

(昭和 13 年 1 月)

二葉堂のおじいさん

白井勝之助先生と言えば、固苦しいし、白井勝之助翁と言えば、いかにもとってつけたようで、やはりわれわれには「二葉堂のおじいさん」と言うのが、いちばん親しみやすい。拙宅に用事があって電話をされる時は「二葉堂のじいさんだ」と名乗られる。なにしろ明治 34 年 10 月に元村小学校の訓導。日露戦争中は陸軍の伍長だったそうだから古い古い話である。

先生の処世訓は、「断固して行えば、鬼神もこれを避く」で、グズグズと考えているよりは、まずやるという主義だから、この点でも筆者と意気相投合し、話し出すと 1 時間でも 2 時間でも、時の経つのを忘れる。

この一文を草するために、先生より昔の思い出をうかがっていた際「過ぎ去ったことにクヨクヨせず、いつでも前進してゆきたいものです」と言われたのは、ピリピ人への手紙 3 章 13 節にあるパウロの言葉と同じですと申し上げたら、そこを写しておられた。それは、

「兄弟たちよ。わたしはすでに捕えたとは思っていない。ただこの一事を努めている。即ち、後のものを忘れ、前のものに向かってからだを伸ばしつつ、目標をめざして走り、キリスト・イエスにおいて上に召して下さる神の賞与を得ようと努めている」

という個所である。

信仰生活とは、「後忘前進」の生活であり、この意味において、われわれクリスチャンは絶えず向上し、絶えず前進しなければならぬ、澱んだ水はくさる。… (66・5)